

《補導員の手記》

出会いは成長の種

「加藤さん、またね。」

大きい声でそういいながら、姿が見えなくなるまで手を振り続けてくれたAくん。

私が、小学生のAくんと初めて会ったのは、警察署の少年相談室でした。

Aくんは、友達と一緒に近くのお店で複数回万引きし、さらには、他人の自転車を無断で乗り回していました。

Aくんのお母さんからは、今後Aくんが万引きを繰り返さないように定期的に警察に関わってほしいという話があり、この面接をきっかけに立ち直り支援活動としてAくんと関わることになりました。

最初の面接の時もAくんは相変わらずうつむいたままでしたが、Aくんの好きなゲームの話題を出しながら少しずつAくんを理解することにしました。

また、「万引きをしない」「他人の自転車に勝手に乗らない」「1人でお店に行かない」という私とAくんの約束事をつくり、毎日ノートに書いてもらうことにしました。

1か月後、Aくんが「加藤さん、見てください。」と言ってノートを差し出しました。

ノートには、私とAくんが決めた約束事が毎日きちんと書き込んでありました。

私がAくんを褒めると、Aくんは満面の笑みで「これからも頑張る。」と話してくれました。

その後も、Aくんは毎日ノートに書き続け、ノートを見なくても暗記するほどになり、約束事も守ってくれて

少年女性安全対策課

浜通り少年サポートセンター

少年警察補導員

加藤 美希



いました。

支援を始めた頃は、俯いてばかりいたAくんでしたが、面接の回数を重ねるうち「加藤さん、ほくね。」と言って、自分から積極的に話をするようになり、時には「今度はほくのお家に来てね。」と話し、家庭訪問を終えて帰る私に必ず「またね。」と言って、姿が見えなくなるまで手を振ってくれました。

ある日、Aくんのお母さんが私に、「Aは中学生になっても、警察署に通いたいと言っているんです。」と話してくれたとき、この支援活動がAくんの日々の生活の中で頑張る力、前向きな力になっていると感じました。

私自身、Aくんのほかにも様々な少年たちと出会い、関わる機会がありました。

少年の問題行動が改善されたケースもあれば、中には非行を繰り返してしまったケースもあり、もっと自分がこうしていればと毎回自分の無力さを実感し反省しています。

少年に必要な支援は1人1人違います。

それが何かを知るためには、少年と信頼関係を築き、少年の本音を知ることが大切だと思います。

私自身も、少年が心を開いてくれるためにはどうしたらいいだろうかと悩むことばかりですが、Aくんが少しずつ良い方向へ変わり、成長していった姿を励みにしながら、これからも少年1人1人の心に寄り添い、支援を必要としている少年たちの力になれるような少年警察補導員を目指したいです。

福島県警察からのお知らせ

企業等と連携した防犯講習会の実施

令和5年5月26日、郡山市ハウジングパーク郡山内において、セキスイハイム東北株式会社及び日本ロックセキュリティ協同組合福島支部の協力を得て、防犯講習会を開催しました。

インターホンを活用した訪問者への対応方法の実演や、戸建て住宅の防犯設備の説明、防犯資機材の紹介を行いました。

参加者からは、「インターホンを利用した相手の顔や姿を確認することが、自分の命や財産を守ることに繋がることが参考になった。」等の感想が寄せられました。

